法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-03

〈論文〉『源氏物語』の雨 : 「予告」と「知らせ」の仕掛け

莫, 泊因

(出版者 / Publisher) 法政大学国文学会 (雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要 (巻 / Volume)

103

(開始ページ / Start Page)

38

(終了ページ / End Page)

52

(発行年 / Year)

2021-03-24

(URL)

https://doi.org/10.15002/00025431

論文

『源氏物語』の雨

――「予告」と「知らせ」の仕掛け―

はじめに

第一節 「賢木」「須磨」「明石」巻の雨

莫

泊因

を含む語彙は、『源氏物語』には合計九十六例ある。三十四例に及ぶ。さらに、「長雨」「五月雨」など、「雨」『源氏物語』における「雨」の用例は非常に多く、合計

> た。これは光源氏が須磨へ追放される契機となる。密会が 「賢木」巻で、光源氏と朧月夜の密会は右大臣に見つかっ 「賢木」巻で、光源氏と朧月夜の密会は右大臣に見つかっ 「賢木」巻であるが、放逐のきっか 須磨へ放逐されたのは「賢木」巻であるが、放逐のきっか の須磨流離譚は、雨と深く関連している。光源氏が正式に の須密流離譚は、雨と深く関連している。光源氏が正式に

発覚した夜に、雨が降り出した様子が描かれている。

て、え知りたまはぬに、軽らかにふと這ひ入りたまひまひて、まづ宮の御方におはしけるを、村雨の紛れに雷鳴りやみ、雨すこしをやみぬるほどに、大臣渡りた

て、御簾ひき上げたまふままに

(賢木 一四四頁)

大臣に知らせたのである。換言すれば、 を画策した。間接的ではあるが、密会した二人の関係を右 関係に激怒した右大臣は弘徽殿大后とともに光源氏の放逐 だっただろう。 がすでに鳴りやんでいるため、 ろに入り、 の密会を発見することができたのである。その後、二人 この村雨で触発されたと言えよう。 萠 右大臣が警戒されずに密会の場所に入ることは不可 の音に紛れて、右大臣は気付かれずに朧月夜の 光源氏と朧月夜の密会を発見した。 村雨が降っているからこそ、 もし村雨が降っていなけ 光源氏の須磨流し 右大臣が二人 0) 時

るのである。

さのである。

なのである。

なのである。

なのを瀬が読者にとっては既知のことだが、作中人物の右でのを瀬が読者にとっては既知のことだが、作中人物の右でのを瀬が読者にとっては既知のことだが、作中人物の右でのを瀬が読者にとっては既知のことだが、作中人物の右にこで一つ注意しなければならないのは、光源氏と朧月

雨が降り出した。
光源氏が須磨へ旅立った後の三月朔日に、いきなり暴風

りたまはむとするに、笠も取りあへず。さる心もなき肱笠雨とか降りきて、いとあわたたしければ、みな帰

暮れぬれば、雷すこし鳴りやみて、風ぞ夜も吹く。 思ひまどふに、君はのどやかに経うち誦じておはす。 略)なほやまず鳴りみちて、雨の脚、当たる所徹りぬ のめでするものにて、 召しあるには参りたまはぬ」とて、たどり歩くと見る べくはらめき落つ。かくて世は尽きぬるにやと心細く を張りたらむやうに光り満ちて、 めしう立ちきて、人々の足をそらなり。 いとものむつかしう、 へれば、そのさまとも見えぬ人来て、「など、宮より おどろきて、さは海の中の竜王の、いといたうも よろづ吹き散らし、 暁方みなうち休みたり。 この住まひたへがたく思しなり 見入れたるなりけりと思すに、 またなき風なり。 君もいささか寝入りたま 雷鳴りひらめく。 海の 波いとい 面

(須磨 二一八頁)

や「現世の朝廷」など、幾つかの解釈が可能であろうが、や「現世の朝廷」など、幾つかの解釈が可能であろうが、氏の夢に現れ、なぜ参上しないのかと光源氏を問いただす。氏の夢に現れ、なぜ参上しないのかと光源氏を問いただす。氏の夢に現れ、なぜ参上しないのかと光源氏を問いただす。氏の夢に現れ、なぜ参上しないのかと光源氏を問いただす。正の土砂降りの中で、「そのさまとも見えぬ人」が光源この土砂降りの中で、「そのさまとも見えぬ人」が光源

う予告が行われるのである。 巻末の雨とともに、光源氏がこれから須磨から離れるとい 引用した文章からは判断できない。 いずれにせよ、「須磨」

思われる。 の村雨と類似しており、二つの雨は互いに呼応していると 「須磨」巻末の雨は、光源氏と朧月夜の逢瀬が発覚した時 いきなり降り出し、また雷を伴うという点から見れば、

ていることを知る。 らに、光源氏は紫の上の手紙から、京でも同じく豪雨が降っ 明石」巻に入ってもなお、須磨での暴風雨が続く。 さ

とど空さへ閉づる心地して、ながめやる方なくなむ…」 (紫の上)「あさましく小止みなきころのけしきに、 (明石 二二四頁

を言い残し、姿を消した。光源氏はその指示に従い、 さらに、桐壺院は、 の神の導きに従って明石に移動するよう光源氏に指示した。 よって、「明石」巻の天変地異の伏線が張られているのだ。 の渚へ移動した。これで須磨の雨が終結した。 背景として須磨の雨と呼応する京の雨を設置することに 須磨での暴風雨が止んだ直後、桐壺院の霊が現れ、住吉 須磨の状況を帝に奏上するという予告

渚で待っていた明石の入道は、光源氏に次のように言っ

に神のしるべ違はずなん。ここにも、もし知ろしめす き風細う吹きて、この浦に着きはべりつることまこと げ申しはべらんとて、舟出だしはべりつるに、あやし どろかしはべりつれば、他の朝廷にも、夢を信 とかねて示すとのはべりしかば、こころみに舟のよそ までも、このいましめの日を過ぐさず、このよしを告 ひを設けて待ちはべりしに、いかめしき雨風、 よそひ設けて、かならず雨風止まばこの浦に寄せよ』 らすることはべりしかば、信じがたきことと思うたま を助くるたぐひ多うはべりけるを、用ゐさせたまはぬ へしかど、『十三日にあらたなるしるし見せむ。 (入道)「去ぬる朔日の夢に、さまことなる物の告げ 雷のお じて国

出したところ、異国でも夢を信じて国を助ける例を思い出 三日にあらたなるしるし見せむ」と告げられても、入道は に雨がすでに降っているかどうかはわからない。また、「十 の発言から、住吉の神と推測される。入道が夢を見た朔日 「しるし」の意味を理解できなかった。しかし試みに舟を この「さまことなる物」の正体は、この前にある桐壺院 国の安寧と関わる夢だったと悟った。傍線部の このよし申したまへ」と言ふ。 ことやはべりつらんとてなむ。いと憚り多くはべれど、 (明石 二三一~二三二頁)

の雨と言うことができる。ろかしはべりつれば」があるため、ここの雨も「知らせ」

壺院の幻を見た。 入道が光源氏を迎えた日に、京にいる朱雀帝は、夢で桐

要に、院の帝、御前の御階の下に立たせたまひて、御夢に、院の帝、御前の御階の下に立たせたまひて、御夢に、院の帝、御前の御階の下に立たせたまひて、御夢に、院の帝、御前の御階の下に立たせたまひて、御声に 別にの御事なりけんかし。いと恐ろしういとほしと思いて、后に聞こえさせたまひければ、「雨など降り、しきやうに、思し驚くまじきこと」と聞こえたまふ。 せっしきやうに、思し驚くまじきこと」と聞こえたまふ。

(明石 二五一~二五二頁)

をなし、電気を輸送するようにストーリーを展開させていたない、光源氏の召還を決意した。これ以降「明石」巻には雨り、光源氏の召還を決意した。これ以降「明石」巻には雨がら始まり、「明石」巻における京の雷雨で終わりを告げ、から始まり、「明石」巻における京の雷雨で終わりを告げ、から始まり、「明石」巻における京の雷雨で終わりを告げ、から始まり、「明田」巻における京の雷雨で終わりを告げ、から始まり、「別回路、のような構造を呈している。。別回路、は、スイッチが閉じていて電流が流れる回路のことを指す電気工学の用語である。設置された一連の雨は回路の記述が表現している。、光源氏の追放を過ちだと悟り、光源氏の追放を過ちだと悟り、光源氏の追放を過ちだと悟り、光源氏の追放を過ちだと悟り、光源氏の追放を過ちだと悟り、光源氏の追放を過ちだと悟り、光源氏の追放を過ちだと悟り、光源氏の追放を過ちだと思いる。

くと思われる。

みると、「須磨」・「明石」巻の一連の出来事を時系列で整理して

- い」と問いただされる。 氏は夢で得体の知れない人を見て、「なぜ参上しな【1】三月朔日の巳の日、須磨で暴風雨が降り出し、光源
- 【3】光源氏は紫の上の手紙から、京でも暴風雨が発生し現れ、「十三日にあらたなるしるし見せむ」と告げる。現れ、「十三日にあらたなるしるし見せむ」と告げる。
- 【4】三月十三日の夜明け前、須磨での豪雨が静まり、故
- え、朱雀帝に奏上すると言い残す。桐壺院の霊が出現し、光源氏に住吉の神の導きを伝
- 【6】三月十三日、京ではなお雨が騒がしく降っている。えられる。入道は光源氏に、迎えるまでの経緯を語る。【5】三月十三日の暁方、光源氏は明石の浦にて入道に迎
- る。 三月十三日、京ではなお雨が騒がしく降っている。 三月十三日、京ではなお雨が騒がしく降っている。

作者は、同じ類型の雨を綿密に設置することによって、一磨流しにまつわる雨が一貫して雷を伴う雨という点である。さえておくべきなのは、「賢木」巻を含めて、光源氏の須物に対する「知らせ」が行われると見て取れる。ここで押という順になる。雨が降るたびに、必ず「予告」か作中人

思われる。つの、閉回路、を作り、物語を構造的に組み立てていると

第二節 「末摘花」「蓬生」巻の雨

の雨が挙げられる。置でもある。その一例として、「末摘花」巻と「蓬生」巻けではなく、場合によって読者に前の場面を想起させる装『源氏物語』における雨は、予告が行われるシグナルだ

方に末摘花のところへ遣わすところで、雨が降り出した。「末摘花」巻で、光源氏が二条院に帰り、後朝の文を夕

宿せむとはた思されずやありけむ。ぞありける。雨降り出でて、ところせくもあるに、笠かしこには文をだにといとほしく思し出でて、夕つ方

(末摘花 二八六頁)

でそこに置いてしまう。 後、光源氏は末摘花の返事を見ると、「見るかひなう」思っは、末摘花への熱意の無さからであるという。さらにその翌朝早く送るべきだったが、光源氏がそれを夕方にしたの翌朝早く送るべきだったが、光源氏がそれを夕方にしたの。 『新編日本古典文学全集』の頭注によると、後朝の文は

紫の紙の年経にければ灰おくれ古めいたるに、手はさ

かしこにはいみじうぞ嘆いたまひける。りとも心長く見はててむと思しなす御心を知らねば、どはいふにやあらむ、さりとていかがはせむ、我はさらんと、思ひやるもやすからず。かかることを悔しなたまへり。見るかひなううち置きたまふ。いかに思ふすがに文字強う、中さだの筋にて、上下ひとしく書いすがに文字強う、中さだの筋にて、上下ひとしく書い

(末摘花 二八七頁)

生」巻だ。
生」巻だ。
生」巻だ。
生」巻だ。
と、すなわち引き続き最後はさりとも心長く見はててむ」と、すなわち引き続き最後はさりとも心長く見はててむ」と、すなわち引き続き最後はさりとも心長く見はててむ」と、すなわち引き続き最後しかしこのように気分を悪くしても、光源氏はなお「我

そばを通りかかり、末摘花が待ち続けていたことを知った。をしていたが、雨が降っている夜に、光源氏が常陸宮邸の「蓬生」巻で、末摘花は荒れた常陸宮邸で困窮な暮らし

るに、形もなく荒れたる家の、木立しげく森のやうなの夕月夜に、道のほどよろづのこと思し出でておはすつるなごりの雨すこしそそきて、をかしきほどに月さびて、対の上に御暇聞こえて出でたまふ。日ごろ降りがて、対の上に御暇聞こえて出でたまふ。日ごろ降りがて、対の上に御暇聞こえて出でたまふ。日ごろ降りが、光

るを過ぎたまふ。

(蓬生 三四四頁)

「夕月夜」という表現から、ここの雨は、「末摘花」巻の「夕月夜」という表現から、ここの雨は、「末摘花」巻の雨と連動しており、「我はさりと巻の雨は、「末摘花」巻の雨と連動しており、「我はさりときが長く見はててむ」という光源氏の気持ちを読者に想起させていると思われる。また、上述したように、「末摘花」をの時点では、末摘花は、最後まで自分の世話をしたいとかう光源氏の気持ちを知らないが、読者はそれを知っている。「蓬生」巻で、光源氏は常陸宮邸を通りかかるまで、る。「蓬生」巻で、光源氏は常陸宮邸を通りかかるまで、る。「蓬生」巻で、光源氏は常陸宮邸を通りかかるまで、る。「蓬生」巻で、光源氏は常陸宮邸を通りかかるまで、着にとってすでに知られている事実を、はじめて新情報と者にとってすでに知られている事実を、はじめて新情報と者にとってすでに知られている事実を、はじめて新情報と

弗三節 「少女」「野分」「藤裏葉」巻の雨

に少女」巻では、夕霧と雲居雁の恋愛関係が内大臣に知 の仲を知らされた。その日に時雨が降っている描写が見ら た後、内大臣は女房たちの内緒話を耳にし、夕霧と雲居雁 宮と語っている間に夕霧が訪れてきた。忍んで大宮邸を出 宮と語っている間に夕霧が訪れてきた。忍んで大宮邸を出 宮と語っている間に夕霧が訪れてきた。忍んで大宮邸を出 宮とが大宮邸に参上し、大

つりたまふ。
つりたまふ。
つりたまふ。
のどやかになりぬるころ、時雨うちして萩の上風く、のどやかになりぬるころ、時雨うちして萩の上風がどころの大饗どもも果てて、世の中の御いそぎもな所どころの大饗どもも果てて、世の中の御いそぎもな

(少女 三四頁)

後に光源氏と対面した。ここにも、降雨の描写が見られる。「野分」巻で、夕霧が光源氏と紫の上の寝所の近くに来て、人の関係が、初めて内大臣に知られてしまうのである。書かれている。この雨に伴い、読者にとって既知である二夕霧と雲居雁の仲について、掲げた一節の直前に詳しく

令やかに吹き入る。 ○であいに吹き入る。 ○でありたまな。道のほど、横さま雨いとは、人少なに思されつらむ、と驚きたまひて、まだほは、人少なに思されつらむ、と驚きたまひて、まだほは、人少なに思されつらむ、と驚きたまひて、まだほが、人少なに思されつらむ、と驚きたまひて、まだほがのでのように降り出づ。

(野分 二七〇頁)

風を伴う一頻りに降った雨は、「少女」巻の時雨と呼応

しき発言をした。 していると思われる。夕霧と対面した後、光源氏は教訓ら

難なきことは難かりける」などのたまふ。 (源氏)「いまいくばくもおはせじ。まめやかにしもあるまじつり見えたてまつれ。内大臣はこまかにしもあるまじっこそ、愁へたまひしか。人柄あやしうはなやかに、男々しき方によりて、親などの御孝をも、いかめしき男々しき方によりて、親などの御孝をも、いかめしき男々しき方によりて、親などの御孝をも、いかめしきまるまで才たぐひなく、うるさながら、人としてかくまるまで才たぐひなく、うるさながら、人としてかくまるまで才たぐひなく、うるさながら、人としてかくまるまで才たぐひなく、うるさながら、人としてかくまるまで才たぐひなく、うるさながら、人としてかくにいいました。

(野分 二七二頁)

「人に知られない心の奥底。心のすみずみ。また、人知れると、もったいぶって父親顔で夕霧に教訓する。夕霧に与ると、もったいぶって父親顔で夕霧に教訓する。夕霧に与させたのは、夕霧に与える光源氏の、内大臣に関する発いる。しかしながら、作者が光源氏に、内大臣に関する発いる。しかしながら、作者が光源氏に、内大臣に関する発いる。しかしながら、作者が光源氏に、内大臣に関する発いる。しかしながら、作者が光源氏に、内大臣に関する発いる。しかしながら、作者が光源氏に、内大臣に関する発いるだけではなく、上掲の「少女」の一節と「藤裏葉」巻におれた二人が和解する場面との連動を考慮しているのだ、古がれた二人が和解する場面との連動を考慮しているのだ。

潜在していると考えられる。 潜在していると考えられる。また、「心の隈」に「多く」 が付いているため、人には察知できない内大臣の考えが複が付いているため、人には察知できない内大臣の考えが複が付いている考え」の意である。また、「心の隈」に「多く」ず抱いていると考えられる。

てきた内大臣は、大宮の法事の日に、夕霧に声をかけ、和「藤裏葉」巻で、これまで夕霧に話しかけることを憚っ

解を求めた。

たまふことやありけん、袖を引き寄せて、(下略)でに、なほながめ入りてゐたまへり。心ときめきに見きに、いとどうちしめりて、「雨気あり」と人々の騒きに、いとどうちしめりて、「雨気あり」と人々の騒食だどだどしきに、大臣、昔思し出でて、なまめかして、みな帰りたまふほど、花はみな散り乱れ、夕かけて、みな帰りたまふほど、花はみな散り乱れ、

(藤裏葉 四三三頁)

和解をもたらしたと言えよう。ありながら、降ってきそうな雨の模様は、内大臣と夕霧のかされ、内大臣は夕霧に話しかけてみた。間接的な原因でかされ、内大臣は夕霧に話しかけてみた。間接的な原因でのされ、内大臣は夕霧に話しかけてみた。と騒いでいる人々の中で、夕霧はぼったが、

定内のことである。いるため、夕霧に和解を持ちかけるのは、読者にとって想いるため、夕霧に和解を持ちかけるのは、読者にとって想ことだった。一方、直前に内大臣の和解の意思が書かれての大臣から話しかけられたのは、夕霧にとって予想外の

たまふ。
たまふ。
たまふ。
たまふ。

(藤裏葉 四三三~四三四頁

霧との和解が暗示される)、雨の日に決着がつく 内大臣に発見される)、 人に纏わる物語は、 の隈」と忠実に連動している。夕霧、 ならず」は、 達成される)。これも光源氏の須磨流しと同じく、 ここの雨は「少女」巻及び「野分」の 回路 頻りに降る驟雨である。 の様相を表していると思われる。 夕霧の驚きを表しており、「野分」巻の「心 雨の日に始まり(夕霧と雲居雁の 雨の日に節目を迎え(内大臣と夕 傍線部の「いかに思ひて例 雲居雁、内大臣の三 雨と同じく、 (和解が つの 風を 仲

第四節 宇治十帖の雨

次のように述べた。 次のように述べた。 家間氏は、浮舟物語における雨を「清めの雨」と解釈し、 原岡氏は、浮舟物語の雨がどのような機能を果たしてい でいる。浮舟物語の雨がどのような機能を果たしてい は、窓。 でいる。浮舟物語の雨がどのような機能を果たしてい ないについて、原岡文子氏と三田村雅子氏の論考がある。 のように述べた。

べての背後には、晩秋の長雨が降り注いでいる。と言えるのではないか。露顕、苦悩、そして失踪のすでもの」の運命を暗示し、やがて川と共にすべてを押でもの」の運命を暗示し、やがて川と共にすべてを押がるイメージを負って、薫との出逢いの当初より「な浮舟物語に執拗にまつわる「雨」もまた、「水」に繋浮舟物語に執拗にまつわる「雨」もまた、「水」に繋がるイメージを負って、薫との出逢いの当初より「ながるイメージを負って、漢との出逢いの当初より「ないての背後には、晩秋の長雨が降り注いでいる。

浮舟の身体は宇治川と接触できていないのである。また、下で行き倒れている状態で横川僧都に発見された。つまり、浮舟は入水を図ったものの、結局入水を果たせず、大木のめる力を構成する雨であると原岡氏は主張した。しかし、すなわち、浮舟物語の雨は、宇治川と共に浮舟の罪を清すなわち、浮舟物語の雨は、宇治川と共に浮舟の罪を清

「手習」巻の本文から、浮舟が発見された時に雨が降って く見当たらないため、雨と浮舟の身体との接触も確認でき く見当たらないため、雨と浮舟の身体との接触も確認でき い流す」と考えて良いのか、疑問に思わざるを得ないとこ ろである。さらに言えば、原岡氏は「入水、贖罪を導いた」 と結論付けたが、どこの雨がどのようなルートで、浮舟を と結論付けたが、どこの雨がどのようなルートで、浮舟を と結論付けたが、どこの雨がどのようなルートで、浮舟を と結論付けたが、どこの雨がどのようなルートで、浮舟を とお論付けたが、どこの雨がどのようなルートで、浮舟を とお論付けたが、どこの雨がどのようなルートで、浮舟を となる、三田村雅子氏は、浮舟物語の雨を「隠されていた ものを顕在化させる物語内の装置」と見て、下記のように ものを顕在化させる物語内の装置」と見て、下記のように 述べた。

されるのか。

浮舟物語における「水」は、当初泉川の「増水」のように、東屋の降り来るのように、次第に浮舟その人のるが、物語の進み行きに伴って、次第に浮舟その人の内面と関わり、同調していくうねりを獲得していく。内面と関わり、同調していくうねりを獲得していく。内面と関わり、同調していくうねりを獲得していく。

一致している」と言うより、「情が景に一致している」と波動を顕在化させるというのであろう。これは「景が情に何を顕在化させるかといえば、隠されていた浮舟の心の

「青まって」には昇代でよるい見っちら。致」である。だが、二人の使いが鉢合わせした日の雨など、場にある風景に牽引されながら受動的に同調する「情景一言うほうがふさわしい。つまり、人物の心情が主導的な立言うほうがふさわしい。つまり、人物の心情が主導的な立

もない。ではその雨はどのような雨なのか。なぜ雨が設置善浮舟物語の雨は、「清めの雨」でも「情景一致」の雨で「情景一致」では解釈できない雨もある。

らかにしていく。 関わる雨を取り上げ、浮舟物語に設置された雨の機能を明移された後の雨である。本節では、注として浮舟の失踪に浮舟の失踪前後の雨。第三段階は、浮舟が失踪し、小野に浮舟の失踪前後の雨。第三段階は、浮舟物語における雨は、三段階に分けられる。第一段階

||浮舟が出奔する前の雨

いた日には、雨が降り続いていた。と薫双方より浮舟のところに文が届く場面がある。文が届と薫双方より浮舟のところに文が届く場面がある。文が届まず第一段階の雨から見てみよう。「浮舟」巻に、匂宮

きものにこそと思すもかたじけなし。絶えてわりなく思されければ、親のかふこはところせ雨降りやまで、日ごろ多くなるころ、いとど山路思し

(浮舟 一五七頁)

ころに複数回来ているということである。

る。 降ったこの日の出 ここの雨 後日、 は、 匂宮と薫の使者が同時に浮舟のところにやって 一見何の変哲もない晩春の風景だが、雨 来事は、浮舟の入水を触発したと思われ

はべる」など、これは多く書きたまへり。 む方もうしろめたくなむ、いとどほれまさりてながめ 返りもなかりしを、「いかに思し漂ふぞ。風のなびか 殿 かがととぶらひたまへり。(中略) 宮は、昨日の御 の御文は今日もあり。 なやましと聞こえたりしを、

ば、 るぞ」と問ふ。 ける。殿の御随身、 雨降りし日、来あひたりし御使どもぞ、今日も来たり (随身) 「まうとは、 かの少輔が家にて時々見る男なれ 何しにここにはたびたびは参

(浮舟 一六九~一七〇頁)

推測される。すなわち、薫・匂宮の使者たちは、 このころ浮舟に薫・匂宮両方から手紙が寄せられていると ことになる。また、「宮は、昨日の御返りなかりしを」より、 降りやまで」の日から、少なくとも二日以上経過している 降りやまで」の日とは別であることがうかがえる。また、 「なやましと聞こえたりし」は前文に記述がないため、「雨 一殿の文は今日もあり」とあるため、この日は上掲の「雨 浮舟のと

> 見て不審に思い、童に使者を尾行させた。これで匂宮と浮 まで」の日の出来事にあると言えよう。 になった。薫の詰問に強い恐怖を感じた浮舟は、ついに入 舟の関係が薫に知られてしまい、薫が浮舟を詰問すること の日だけだ。この日、薫の使者である随身は匂宮の使者を 水を決意してしまう。浮舟が入水する遠因は、「雨降りや しかし、両方の使者が顔を合わせたのは、「雨降りやまで」

返歌を贈った。匂宮への返歌は 「雨降りやまで」の日に、浮舟はそれぞれに匂宮と薫に

かきくらし晴れせぬ峰の雨雲に浮きて世をふる身をも

(浮舟 六〇頁

であり、薫への返歌は、

さまさりて つれづれと身を知る雨のをやまねば袖さへいとどみか

頁

が潜んでいると思われる。 二首の歌に、すでに浮舟の運命の行方に関する重大な暗示 その後「まじりなば」と書き足されている。

であり、

匂宮への返歌について、本居宣長は『源氏物語玉の小櫛

と符合する。と符合する。
と符合する。

本で学舟の所在が明かされた時の「雨など降りしたいると解すべきであろう。後述するが、ここの「身を知る雨」は、比喩的に涙を指していると解せるが、この返歌は、浮舟が目の前に降り続けている雨に即して詠んだ歌である。したがって、「身をけている雨に即して詠んだ歌である。したがって、「身をけている雨に即して詠んだ歌である。したがって、「身をけている下側であるう。後述するが、ここの「身を知る雨」は、比喩的に涙を指していると解すべきであろう。後述するが、ここの「身を知る雨」は、と解すべきであろう。後述するが、ここの「身を知る雨」は、上でいると解すべきであろう。後述するが、ここの「身を知る雨」は、上でいると思われる。

の雨は浮舟の行方を知らせてくれた雨であり、これも返歌宮とその女房から浮舟生存の情報を得る。薫にとって、こぼきて世をふる身をもなさばや」と一致する。一方、薫はなってしまったのだ。これは匂宮への返歌にある「雨雲に雨の日に失踪した浮舟は雨の中に姿を消し、行方不明に雨の日に失踪した浮舟は雨の中に姿を消し、行方不明に雨の日に失踪した浮舟の行方を知らない匂宮から見れば、物語の最後まで浮舟の行方を知らない匂宮から見れば、

いると言えるのではないだろうか。ら見れば、浮舟の行方がそれぞれにどうなるかを予告してに、「浮舟」巻における二首の返歌は、匂宮と薫の視点かに書かれた「身を知る雨」と一致する。以上見てきたよう

■浮舟失踪前後の雨

浮舟宛の手紙が宇治に届いた。「蜻蛉」巻の冒頭で、浮舟が失踪した翌朝に、母君から「蜻蛉」巻の冒頭で、浮舟が失踪する前後の雨を見てみよう。

れば。
ここに迎へたてまつりてむ。今日は雨降りはべぬべけるのへ渡らせたまはんことは近かなれど、そのほど、心地も例ならずうたてはべるを、なほいと恐ろしく。心地も例ならずうたてはべるを、なほいと恐ろしく。いとおぼつかなさにまどろまれはべらぬけにや、今宵いとおぼつかなさにまどろまれはべらぬけにや、今宵

(蜻蛉 二〇一~二〇二頁)

ある僧の発言を見れば、雨が降り出す時間がわかる。か。「蜻蛉」巻の記述からは推測できないが、「手習」巻にだったが、手紙が宇治に届いた時には、雨は降っていたの母君が手紙を書いた時は、雨が降ってきそうな空模様

:) 「雨いたく降りぬべし。かくておいたらば、死に

心々に言ふ。

(中略) この大徳して抱き入れさせたまふを…(中略)の変化にもあれ、目に見す見す、生ける人を、かのる雨にうち失はせんはいみじきことなれば」など、かる雨にうち失はせんはいみじきことなれば」など、かいるに言ふ。

(手習 二八四~二八五頁)

到着時、 と記されているため、浮舟が救助された夜に降り出した雨 た後である。時方が到着した時、「雨すこし降りやみたれど」 は、浮舟が失踪した翌日であり、 推定できる。匂宮の使者として、 判断は分かれようが、「かかる雨にうち失はせん」とある だ降っていないのか、降っていてこれから激しくなるのか、 その後、 手紙が届いた時点でまだ降っていると見られる。 いたく降りぬべし」から、雨が降ってきそうだが 浮舟が救助された時、 雨が降っていることが記述されている。 母君も宇治に到着し、 雨がすでに降り出していると 時方が宇治に到着したの 母君の手紙が宇治に届 浮舟の失踪を知らされ た ま 11

雨のいみじかりつる紛れに、母君も渡りたまへり。

蜻蛉 二〇八頁)

「予告」、あるいは「知らせ」の性質を持っている。母君が、ここまで検証してきたように、『源氏物語』における雨は、

致しているのである。

致しているのである。

な見れているのである。

致しているのである。

我は、雨の進行と完全に合いは、一切に対していたが、これからどうなるかはわからなかった。
は降っていなかった。その時、母君はすでに浮舟の死を
明は降っていなかった。その時、母君はすでに浮舟の死を

る。 でに降っていた。すなわち、当事者ではない匂宮から見れて、『かきくらし晴れせぬ峰の雨雲に浮きて世をふる身をに、『かきくらし晴れせぬ峰の雨雲に浮きて世をふる身をに、『かきくらし晴れせぬ峰の雨雲に浮きて世をふる身に、『かきくらし晴れせぬ峰の雨雲に浮きて世をふる身に、『かきくらし晴れせぬ峰の雨雲に浮きて世をふる身をは、浮舟が救助された直後に雨が降り出していることは、僧浮舟が救助された直後に雨が降り出していることは、僧

|浮舟が小野に移された後の雨

1に、浮舟救助の経緯を語る時である。||回にわたって用いられる。一回目は、横川僧都が明石中||再習||巻で、「雨など降りしめやかな夜」という語句は最後に、浮舟が小野に移された後の雨を検討する。

はせたまふ。雨など降りてしめやかなる夜、召して、夜居にさぶら

(手習 三四四頁)

している」という確実な情報が、はじめて当事者以外の人 を持つ小宰相の耳にも入ったため、「浮舟が生存し、 のかは知らなかった。だが、 と明石中宮は推定したが、具体的にどのような身分の かされた。 に知られることになった。 僧都が話した人物は、宇治で失踪した女であ 明石中宮は僧都から浮舟救助と出 僧都の話が、薫と親しい関係 家の経緯 出家 人な を聞

回目は、 明石中宮と薫が語り合う時である。

हिं など降りてしめやかなる夜、后の宮に参りたまへり。

〔手習 三六二頁

聞き、 げられ、 雨」と照応する雨である、と思われる。浮舟は雨の日に起 のをやまねば袖さへいとどみかさまさりて」の「身を知る 浮舟の境遇と関わるものであり、 なる夜」と描かれた二回の雨は「知らせ」の性質を持つ、 情報を薫に伝えるように指示された。薫は小宰相から話 きた出来事に触発されて入水を決意し、 薫と中宮の話が終わった後、 浮舟の生存と出家を知る。「雨など降りてしめやか ″閉回路″ 浮舟の失踪にまつわる物語は、 雨の夜に小野での生存と出家が外部の人間 の構造をなしている。 小宰相は中宮から、 「つれづれと身を知る 雨が降り出 雨 によってつな した夜 舟 0

> が、二人とも、 まざま訊き、横川僧都も浮舟発見以来の始終を薫に話した 思われる。薫は比叡山を訪れ、浮舟について横川僧都にさ と「知らせ」が両方とも行われていないからではないかと ない巻である。「夢浮橋」巻では、浮舟に関して、「予告_ 習」・「夢浮橋」巻の中で、「夢浮橋」巻は唯一雨の記述が 宇治十帖における雨はこれで完結するが、 浮舟を女主人公とした「東屋」・「浮舟」・「蜻蛉 僧都は浮舟を発見した当時の状況について、 新しい情報を得ることができなかった。 なお問題が残

に加持させなどなんしはべりける。なにがしは、 さやうなることにやとめづらしがりはべりて、 さまながら、さすがに息は通ひておはしければ、 むべき齢ならねど、母の旅の空にて病重きを、 らの中に験ある者どもを呼び寄せつつ、かはりがはり ひ嘆きてなんはべりし。この人も、亡くなりたまへる まへずなんはべりし。 うたまへしほどに、その 念仏をも心乱れずせさせむと、仏を念じたてまつり思 (僧都)「親の死にかへるをばさしおきて、 魂殿に置きたりけん人のたとひを思ひ出でて、 人のありさまくはしくも見た もてあつか 弟子ば 助けて

(夢浮橋 三七六頁

傍線部は明らかな嘘である。 僧都が浮舟を助

と語

ったが、

しているのである。 る。このように、僧都は真実と偽りを混ぜながら薫に話を 舟のために加持を行い、浮舟をよく観察していたはずであ の様子をよく見ていなかったと言っているが、実際は、 二八五頁)と思ったからである。また、横川僧都は、 けたのは、 「残りの命一二日をも惜しまずはあるべからず」(手習 昔物語にある魂殿の話を思い出したからでは 浮 舟

薫は浮舟の身分について 方、薫も僧都に対して似たような態度をとる。 例えば、

なまわかむどほりなどいふべき筋にやありけん。 (夢浮橋 三七八頁)

浮橋」 連動するストーリーがない。そのため、 浮橋」巻が終結してしまうため、「浮舟」巻以来の物語と なかった。加えて、薫と浮舟の再会が実現できないまま 得ることができず、新しい情報に伴う「知らせ」は行われ 手の真意を探ろうとしている。結局二人とも新しい情報を を避ける。薫と僧都は、 と僧都に話した。 「浮舟」巻から「手習」巻まで流れてきた一連の雨が、 僧都に対して過去推量の助動詞「けむ」を使い、 一巻で断絶してしまったのだろうと考えられる。 薫は無論、 できるだけ真実を隠しながら、 浮舟の身分をよく知ってい 雨は設置され

おわりに

これからどのようなストーリーが展開されるのかを予告す 関連性を持つ異なるストーリーがうまくつながり、 作者が綿密に設置した「予告」と「知らせ」の雨によって、 と「知らせ」の機能を持つとは限らない。ただ、本論では る。もちろん、『源氏物語』における雨は、すべて「予告」 とを新しい情報としてはじめて作中人物に知らせる雨であ る雨である。「知らせ」の雨とは、読者にとって既知のこ と「知らせ」の雨について検証してきた。「予告」の雨とは 以上のように、本論では、 ″閉回路′ のような構造を呈すると、結論付けたい。 『源氏物語』における「予告」

注

13

- $\widehat{1}$ 用例数の統計は、 http://www.genji.co.jp/kensaku.htm を参照
- 藤村潔「 第六六号、二〇〇一年)はその一例である。 源氏物語蜻蛉巻の降雨」 (『藤女子大学国文学雑誌

2

3

- 須磨・明石巻の天変」(『国語と国文学』二〇一八年二月号 「海竜王」と「住吉の神」については、井内健太「『源氏物語
- 「さまとも見えぬ人」について、『新編日本古典文学全集』 が詳しい 神か仏か鬼か霊か、 何とも正体の知れない人。 次の明石巻の は 日本文學誌要

 $\widehat{4}$

と注す。 この「宮」は、海神である住吉の神殿であることが推測される」 住吉の神の神意を明石の入道に伝える夢の中の者の言葉から、

- 5 源氏物語①』二八六頁、頭注二)。 氏の熱意のなさのほどを物語る」(『新編日本古典文学全集 「後朝の文は翌朝早く送るのが普通で、夕方になったのは、
- 6 現 原岡文子「雨・贖罪、そして出家へ」(『源氏物語の人物と表 その両義的展開』翰林書房、二〇〇三年
- 7 三田村雅子「濡れる身体の宇治―水の感覚・水の風景」(『源 氏研究』第二号、翰林書房、 一九九七年)
- 8 前掲注(6)論文に同じ。
- 9 前掲注(7)論文に同じ。
- 10 針本正行「「身を知る雨」表現史論―― 『古今集』・『伊勢物語』・ 勢物語の表現史』笠間書院、二〇〇四年)を参照 『和泉式部日記』・『源氏物語』を中心として」(室伏信助編『伊

付記

『源氏物語』の本文引用は、以下の注釈書に拠り、巻名とページ

数を記し、私に傍線を施した。 阿部秋生ほか 校注『新編日本古典文学全集 源氏物語』全六

『源氏物語玉の小櫛』の本文引用は、 (筑摩書房) に拠る。 大野晋・大久保正編 「本居

宣長全集』

冊(小学館

(ばく はくいん・本学大学院博士後期課程